伊予路に響く唄 ■6■

伊予節
（松山市）

節回し複雑な座敷唄

愛媛を代表する民謡の伊予節は、三分前後の座敷唄。松山地方の名物名所を紹介しながら歌詞が進む。松山を知らない人には地域のイメージを何となく与えてくれ、松山人にとっては地元の〝売り〟を再認識させてくれるような唄だ。

歌い出しは、ずばり「伊予の松山　名物名所」で、その後の歌詞はほとんどが固有名詞。台風で打ち上げられた砂に埋まって挿し木のように見えたことが由来の「吉田さし桃」、弘法大師伝説にまつわる片目鮒（フナ）。そして、今出地区の伊予絣（かすり）で締めくくり。竹や山にまつわる「竹づくし」「山づくし」のパターンもある。

節回しが複雑で、歌いこなすのは難しい。民謡に詳しい松山市坂の上の雲チームアドバイザーの石山清志（六五）は「小唄を卒業した人が挑むようなレベルの高い民謡。松山に赴任した人が転勤するころにやっと覚えることから転勤節の別名もある」と説明する。

「江戸の芸者『おいよ』が歌っていた」「松山で生まれ、江戸に伝わった」など発祥については諸説ある。松山市誌によると、伊予節の名は一八四一（天保十二）年ごろまでさかのぼれ、松山名所づくしの歌詞は一八〇〇年代前半に生まれたとされる。

江戸時代末期の流行歌で、昭和の世まで歌い継いだのは芸者や旦那（だんな）衆。一般家庭で歌われる労作唄のような民謡ではなかった。現在は、松山市内の芸者だった吉三＝故人＝の歌い方を正調にしている。

松山市東石井五丁目で瀬戸内料理店を営む山田孝子（七）は三十年間、伊予節に親しんできた。「ちょっと歌いにくいから、挑戦してみようという気になった」。

女将（おかみ）の山田は、客の求めに応じて三味線を手にする。小節（こぶし）のきいた歌声が弦の音色に絡み、裏声っぽい「チョイト」の文句が小粋に響く。大人数なら音の大きいばち、小部屋の小宴会ならつま弾き。音響効果を意識した使い分けだ。

戦後十年を数えるころから花柳界の衰退とともに地元の歌い手が減ったが、経済人らによる復興の取り組みがあった。二〇〇三年から松山市で全国大会が開かれており、各地の民謡愛好家がのどを振るわせている。＝敬称略

伊予の松山　名物名所　高井の里の　ていれぎや
三津の朝市　道後の湯　紫井戸や　片目鮒
音に名高き　五色素麺（そうめん）　薄墨桜や　緋（ひ）の蕪（かぶら）
十六日の初桜　チョイト　伊予絣
吉田さし桃　小かきつばた

三味線を手に伊予節を歌う山田孝子さん

ホームページ動画ニュース
〈毎月第1、第3月曜日に掲載します〉
「伊予節」は愛媛新聞社ホームページで視聴できます。